

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.

共同利用・共同研究課題

「イスラーム聖者廟の財産管理に関する史料学的研究：イラン・サファヴィー朝祖廟を事例として」

2019年度第3回研究会（公開研究会）

「アルダビール再考：前近代イランにおけるタリーカ・聖者廟・都市」

日時・場所 2020年2月15日（土）13:00-18:00 東京外国語大学 AA 研・大会議室(303)
プログラム

13:00-13:10 趣旨説明 渡部良子（AA 研共同研究員・東京大学）

13:10-13:50 発表1

矢島洋一（AA 研共同研究員・奈良女子大学）「新出『ハヤーティー史』に見るサファヴィー教団」

13:50-14:30 発表2

杉山雅樹（AA 研共同研究員・京都外国語大学）「『ティムールのワクフ文書』再考」

14:30-14:50 休憩

14:50-15:30 発表3

守川知子（AA 研共同研究員・東京大学）「聖都アルダビールとサファヴィー朝：サフィー廟を中心に」

15:30-16:10 発表4

杉山隆一（AA 研共同研究員・東京大学東洋文化研究所）「ガージャール朝期のイマーム・レザー廟」

16:10-16:30 休憩

16:30-16:45 コメント 二宮文子（AA 研共同研究員、青山学院大学）

16:45-18:00 総合討論

研究会報告

通算第6回目となる研究会の第1日目は、第2年次の成果発表として、本共同研究がその財産管理関連史料の研究を進めてきたイラン北西部アルダビールのサファヴィー教団名祖廟シャイフ・サフィー廟の発展の歴史について、タリーカ（スーフィー教団）・都市・聖者

廟運営システムの比較研究など多角的な視点から考察する公開研究会を開催した。

第1報告、矢島洋一「新出『ハヤーティー史』に見るサファヴィー教団」は、近年新たに発見されたタフマースプ1世時代の史書 *Tārīkh-i Hayātī* が、サファヴィー教団とサフィー廟についていかなる新情報をもたらすかを示すものだった。初代教主サフィー時代に関しては既知の聖者伝 *Ṣahwat al-Ṣafā* を情報源としつつ独自の情報も含むこと、サファヴィー教団の軍事的発展と政治権力への転換期である第5代教主ハイダル時代の記述は他史料より詳細で、内部史料を欠く15世紀の教団の動向について貴重な史料となること、そしてサフィー廟施設の建設や歴代ムタワッリー（ワクフ管財人）に関する情報は、サフィー廟運営システムの形成を伝えていることが明らかにされた。質疑では著者ハヤーティーの素性や情報源が問われたが、著者の伝記情報は現在のところ見つからないもののスーフィズムの素養がありスーフィズム文献を利用した可能性が報告者から示唆され、今後の更なる研究が期待された。

第2報告、杉山雅樹「『ティムールのワクフ文書』再考」は、ティムール朝建国者ティムールが第3代教主ハージャ・アリーに与えたワクフ文書を再検討した。この文書はすでに Horst により偽書であるとされていたが、報告者は Horst が用いなかった写本とサフィー廟不動産登記目録 *Ṣarīḥ al-Milk* に収録されたテキストも踏まえた新たな校訂作業を通して当該文書が偽造と見なしうる具体的根拠を明らかに示し、その上で、サファヴィー朝においてティムールに帰せられる偽ワクフ文書がいかなる意味を持ち得たかという考察を行った。この偽文書が、サファヴィー朝がその前身であるサファヴィー教団の権威・聖性にまつわる歴史をいかにして継承・再生産しようとしたかを示す、重要な事例であることが改めて示された。

第3報告、守川知子「聖都アルダビールとサファヴィー朝：サフィー廟を中心に」は、サファヴィー朝祖廟となったサフィー廟と都市アルダビールの16世紀～17世紀における発展を、*Ṣarīḥ al-Milk* や『ハヤーティー史』の廟に関する記述、ヨーロッパ人旅行者の記録・絵図などに基づき再構成するものだった。サフィー廟の建築構成と、サフィー廟を核として発展した「聖都」アルダビールの都市プランは、その後サファヴィー朝下のイラン高原で発展していく他のシーア派聖者廟・聖地とは異なる独自性を持つという指摘は、サファヴィー朝におけるサフィー廟・アルダビールの位置づけを再考する上で重要である。不動産登記目録である *Ṣarīḥ al-Milk* のデータや絵図史料を都市研究・聖者廟研究にいかに活用できるかという研究手法の点からも、有益な事例研究であった。

第4報告、杉山隆一「ガージャール朝期のイマーム・レザー廟」は、イラン最大のシーア派聖者廟、イマーム・レザー廟のガージャール朝時代の財産管理と運営の実態を、トゥーマール（巻物文書）と帳簿という聖者廟運営に関わる史料を用い明らかにするもので、ワクフ財の分布と管理システム、廟運営組織と職員、ワクフ財収入を用いた廟の多様な活動の全体

像が紹介された。ワクフ財産管理関連史料から極めて詳細な聖者廟運営制度や聖者廟の活動の多面性が明らかにできることが示されたのみならず、サファヴィー朝時代以降イラン高原で形成されていったシーア派聖者廟の庇護・管理システムとその社会的役割の独自性とは何かという問いを提示するものであった。

以上の研究発表をふまえ、二宮文子（AA 研共同研究員、青山学院大学）から、北インド・アジュメールのチシュティー教団ムイーンヌッディーン・チシュティー廟（d.1236）を事例に、南アジアにおける聖者廟運営システムの特徴をイラン高原との比較を通して紹介するコメントが行われた。インドのイスラーム聖者廟の財政基盤は主に現金の寄進などにより成り立っており、イランのように不動産のワクフではない。そのため廟の運営に関わる人的組織もイランの聖者廟とは大きく異なり、マンサブ制度に基づく管理人任命など、政治権力との関係が重要な意味を持つ。同じイスラーム聖者廟であっても、その運営・財政基盤・政治権力との関係には地域による様々な相違や独自性があることが明らかにされた。

最後の総合討論では、アブドゥルアズィーム廟（テヘラン）・ファーティマ廟（コム）・シャーチェラグ廟（シーラズ）などイランのその他のシーア派聖者廟（イマームザーデ）や、イラクのアタバート、また中央アジアのスーフィー聖者廟など様々なイスラーム聖者廟が運営システムや国家・政治権力との関係という観点から比較された。イランのイマーム廟・主要なイマームザーデはサファヴィー朝期に形成された共通する運営システムを持つが、同じく多数のワクフを擁するシーア派聖者廟でも、アタバートのイマーム・フサイン廟（カルバラ）ではイランのようにワクフを集約的にムタワッリーの下で統括するシステムはなく、管理組織のありかたも異なっている。また中央アジアではタリーカの施設はハーンカー（修行場）が主体であり、廟はその付属施設であるなど、聖者廟の施設・組織・運営のありかたの地域的多様性が指摘されるとともに、サファヴィー朝下で発展したイランの聖者廟運営システムが持つ独自性、その歴史を解明する手がかりとしての王朝祖廟サフイー廟の研究の重要性が、改めて確認された。（文責：渡部良子）

研究報告要旨（文責は各発表者）

「新出『ハヤーティー史』に見るサファヴィー教団」

矢島 洋一（AA 研共同研究員・奈良女子大学）

サファヴィー朝下で書かれたペルシア語史書『ハヤーティー史』はこれまでクンミー『歴史の精髓』の言及により知られるのみで長く失われた史料と考えられていたが、最近その写本が発見されて校訂本が出版された。同書は、サファヴィー家内部の対立、カラコユンル朝・アクコユンル朝との関係、教団施設とその運営など、サファヴィー教団に関する多くの独自情報を含んでいる。その成立過程にはなお疑問の点もあるものの、今後サファヴィー教

国史・サファヴィー朝成立史を考える上で不可欠の史料になると思われる。

『ティムールのワクフ文書』再考

杉山 雅樹 (AA 研共同研究員・京都外国語大学)

本発表では、アッバース 1 世 (在位 1588~1629 年) 治世に発見され、サフィー廟不動産登記目録 *Ṣarīḥ al-Milk* の一部の写本に収録されている『ティムールのワクフ文書』について、その真偽を改めて検討した後、本文書が作成された背景について報告した。

まず、H. Horst による先行研究 (*Timūr und Höğā 'Alī*, Mainz, 1958) では触れられていない、本文書が有するワクフ文書としての決定的な問題点を指摘し、これが完全な贋作であることを改めて確認した。また、文書偽造の背景としては、自らをティムール (在位 1370~1405 年) に重ねようとするアッバース 1 世の狙いがあったことが考えられる。さらに、その結果として、アッバース 1 世がティムールの子孫であるムガル朝君主に対して、ティムールのシャイフ (師) の後継者としての自身の優位性をアピールするようになったことを指摘した。

「聖都アルダビールとサファヴィー朝——サフィー廟を中心に」

守川 知子 (AA 研共同研究員・東京大学)

本報告では、サフィー廟を擁するアルダビールがいかにして発展したかについて、サファヴィー朝のシャー・タフマースプ期 (在位 1524-76 年) に編纂されたサフィー廟関連史料 (*Ṣarīḥ al-Milk* と *Tārīkh-i Hayātī*) と 1637 年に同地を訪れたオレアリウスによる絵図等を用いて検討した。これらの史料からは、「参籠の館 (Chilla-khāna)」や宿泊所や浴場など、他のイマーム廟やイマームザーデには見られない建造物がスーフィー教団のシャイフであったサファヴィー家の祖廟には存在し、「廟」という範疇には収まりきらないサフィー廟の特徴が浮かび上がった。また、*Ṣarīḥ al-Milk* 所収の寄進物件の数量分析からは、サフィーの息子のサドルッディーン (1391 年没) とシャー・タフマースプの時代に集中的に土地の購入や寄進が進められていたことが明らかとなった。すなわち、サフィー廟はサファヴィー朝期に入ってから同王家にとっての「聖廟」として改めて位置づけられ、アルダビールはこのサフィー廟を中心とする「聖都」として、他とは異なる独自の展開を遂げていったと推察されるのである。

「ガージャール朝期のイマーム・レザー廟」

杉山 隆一 (AA 研共同研究員・東京大学東洋文化研究所)

十二イマーム・シーア派第 8 代イマーム、レザー (d.818) の墓廟は、その死没地である現在のイラン・イスラーム共和国のマシュハドに建設された。同廟は、イラン地域における唯

一のイマーム廟であり、14世紀以降のサイイド崇敬の高揚と16世紀に誕生したサファヴィー朝のシーア派化政策によってその存在の重要性が高まり、ワクフ寄進を多数集めると共に、宗教複合体化していくことになった。本発表では、ガージャール朝期の同廟につき、主に王朝後期に作成された史料にもとづき、当該の時代におけるワクフ財の分布、種類といった特徴、廟の運営組織の構造と官吏、ならびにワクフ対象からみた廟の聖なる空間のあり方・宗教複合体としての慈善・教育などのサービスの実態について、先の時代との比較を視野に入れながら検討した。具体的には史料にもとづいて個々のデータを紹介しつつ、ワクフ財の増加や分布の広がり、廟の運営組織の肥大化および王朝宮廷との類似性の継続、ワクフ対象の多様化による既存の慈善・教育事業の拡大、さらにはシーア派の称揚、埋葬・参詣などの面での新たな活動の展開などについて指摘した。検討の中では、先の時代からの変化の背景については十分に踏み込むことができなかつたため、今後さらに史料を読み込んで明らかにする必要がある。